

日本基督一致教会初代牧師・戸田忠厚

中島 耕二

戸田忠厚は日本基督一致教会が創立された1877（明治10）年10月3日、奥野昌綱、小川義綏と共に初代牧師（教師）として按手札を受けた一人である。しかし、その名前はキリスト教界から消えて久しい。では、何故消えたのだろうか。

戸田忠厚は嘉永元年（1848）12月25日に武蔵国忍（おし）藩士水谷岩右衛門の二男として、忍城下（現在の埼玉県行田市）に生まれた。幼名は丑次郎と言った。のち幕臣戸田家の養子となり忠厚と改名した。1865（慶応元）年から1868

（同3）年まで藩内の芳川襄齋塾で漢学を学び、維新後東京に出て1869（明治2）年から3年間、箕作秋坪塾（三又学舎）で英学を学んだ。1872（明治5）年にクッケンボス著、戸田忠厚訳『英文典独学』を出版した。1873（明治6）年から一年間、英国人教師イワートに就いて正則英語を学んだ。平行して築地居留地の米国長老教会宣教師D・タムソンのもとに通い英学修得に努め、そこでキリスト教と出会い同年秋タムソンから受洗し、東京基督公会（現新栄教会）信徒となった。

1875（明治8）年、深川東森下町の英学塾、菁莪学校校長に就任した。同じ頃、新島襄から教派主義を説かれて公会主義のタムソンのもとから、同じ築地居留地域にある米国長老教会宣教師C・カロザースが牧会する東京第一長老教会に、高橋（安川）亨ほか7名とともに転籍した。この頃、英学者から教職者に進路を変更し、同年4月6日の日本長老公会第3回長老会（中会）で教師試験に志願し高橋亨とともに合格した。その後、品川宿および高橋の実家のある千葉県法典（現在の船橋市内）に伝道を試み、間もなく法典長老教会の創立を見た。1876（明治9）年4月4日、カロザースが在日ミッションを辞任すると、

彼に同情する教会員は日本独立長老教会を設立したが、戸田および安川は東京第一長老教会に踏み止まり、新たに仮牧師となったO.M.グリーンと共に開拓伝道に努め、1877（明治10）年6月11日に品川長老教会、同年7月20日に千葉県印旛郡大森長老教会を創立した。

1877（明治10）年10月3日、日本基督公会と日本長老公会および関係外国ミッションが合同し日本基督一致教会が設立され、戸田はその日、按手札を受け翌月、法典教会および大森教会の伝道責任者に任命され家族を伴い大森村に転居した。翌年新たに佐倉教会を立ち上げた。1880（明治13）年6月5日、房総を去って品川教会の牧師に就任した。1882（明治15）年11月11日、岡見辰五郎や岡見清致等が品川教会から分かれて、台町教会（現高輪教会）を設立すると戸田は両教会を兼牧した。1885（明治18）年2月、戸田は品川教会付属知本小学校を開校し、更にこの時期に頌栄英学校教師および二冊の聖教書の翻訳出版も行った。戸田はこうして牧会、教育、文書伝道にと活躍し、加えて日本基督一致教会の中会でも多くの役職に就き、教会内で重きを置くようになっていった。

1887（明治20）年12月17日、第一東京中会の臨時中会が麹町教会で開かれ、席上突然、品川・台町両教会牧師戸田忠厚と露月町教会（現芝教会）牧師安川亨に対する請求書（問責決議案）が提議された。理由は両牧師が品川教会および同教会員を匿名文書によって誹謗したというものであった。中会は取調委員を立てて調査することを決議したが、安川はその認否には触れずこうした嫌疑をもたれたこと自体牧師の資格に欠けるとして、露月町教会牧師を辞任した。一方、戸田は数度にわたり臨時中会への問責出頭を要請されたが、体調不良を理由にこれに応じなかった。

1888（明治21）年4月3日、第一東京中会春期中会が教寄屋橋教会で開かれ戸田もこれに出席

したが、品川教会問題は議題の第 21 条および第 22 条に現われた。中会議事録は「第二十一条（略）戸田教師ニ対スル件ハ都合ニヨリ一切之ヲ放棄セン事ヲ請求ス蓋シコレ会安ノ維持及ビ建徳上ノ便宜ヲ計ランガ為メナリ、戸田教師モ之ヲ承諾ス、之ヲ受テ可トス」、「第二十二條 戸田教師陳謝 小生儀平素金錢ノ帳簿粗漏ナル事ハ今自ラ顧テ改悔スル所ナレバ以後暫ク聖礼典執行ヲ謹ミ以テ自ラ之ヲ陳謝ス、之ヲ受ク」と記録している。こうして戸田問題は白黒決着が着かぬまま終息となったが、戸田はこの「品川教会事件」の責任を取り、すでに前年の 11 月に品川・台町両教会の牧師を辞任し、東京を離れ金沢を中心とした北陸地方の開拓伝道に赴いていた。

戸田は 1886（明治 19）年頃から第一東京中会の要請を受けて、九十九里、宇都宮、伊勢崎方面への開拓伝道に注力していたが、牧師を務める品川教会は岡見清致たち富裕士族層が抜けて品川宿の商人層が中心となり、また教会員数も年々減少し、以前の 60 人台から 40 人台へと教勢が衰えつつあった。更に信徒のモラルも低下して教会浄化の対象となる教会員が続出し、戸田の思いと教会の実態に乖離が生じていた。戸田の足は自然に地方に向かっていった。こうした状況下に牧師と教会員間の信頼関係が崩れて、長老加藤覚の扇動もあって「品川教会事件」が起きたのであった。

当時、日本基督一致教会と日本組合基督教会の合同運動が盛んになっていたが、戸田と安川は先に述べたように新島襄の影響で公会主義から教派主義に転籍した経歴を持ち、その新島は組合側でこの合同に反対する急先鋒であった。ところが、一致教会の主流派を形成しつつあった植村正久や井深梶之助は、日本基督公会創立以来の公会主義を支持し、一致および組合両教会の合同に最も熱心であった。そして、彼らがこれを実現する上で、一致教会内における障害の一つは、教会の先輩でありかつ有力な教師であった戸田忠厚と安川亨の存在であった。こうした背景のもと、この二人が牧会上の揉めごとを格好の材料にされ、教会中央の表舞台から引き降ろされたのであった。この「品川教会事件」は一致教会執行部による有力教師の中央からの排除という意味合いにおいて、その後の 1893（明治 26）年の田村直臣の「日本の

花嫁事件」、さらに翌年の信条改正問題に絡んだ「石原量追放事件」のさきがけとも言える「事件」であった。

戸田はその後、1911（明治 44）年 10 月まで北陸地方で活躍したが、謂わば「遠島」のまま教師定年を迎え、1928（昭和 3）年頃故郷行田で召天した。日本基督教会機関紙『福音新報』にはその記事は載らなかった。（了）

江戸時代から明治初期のオルガン についての考察

赤井 励

すでに海老沢有道博士が「洋楽伝来史」中で紹介されたように、織田信長の生きた時代にイエズス会の宣教師たちが小型のパイプオルガンを持参し、その後、日本でオルガンが作られたという記録は、宣教師たちが本国に報告した文献から歴史事実であろう。しかし続く豊臣秀吉に始まる禁教時代に徹底したキリスト教文化の破壊が始まり、キリスト教徒の受難とともにオルガンの痕跡は途絶えてしまい、話題を伝承することすら危険が伴うようになった。江戸時代のオルガンについては海老沢博士の著作でも未決のまま残っていたので、私はこのテーマについて 2001 年から日本オルガン研究会「オルガン研究」（29 号および 32 号）に発表してきた。

徳川時代、キリシタン文化は地下に潜伏するようになっていたが、排耶書と呼ばれる反キリスト教文献に、わずかにオルガンのことが現れる。それが寛永 16 年（1636）「吉利支丹退治物語」に出現する「ヲロガン」である。また放送大学の笠原潔先生の論文「江戸のヲルゴル」（2001 年、放送大学研究年報 19 号）にもあるように、江戸時代の外交、交易の記録、漂流民や海外渡航の情報が若干、オルガンに関して報告されている。江戸時代はイエズス会を忌避した幕府がプロテスタントのオランダやイギリスとの交易を好み、オルガン情報はカトリック側ではなくオランダ経由でもたらされた模様である。オランダではオルガンをオルゴルと発音する。この単語はそのまま西洋の

鍵盤楽器・自動楽器（音楽時計までも含む）全般を指す名称として我が国に定着し、明治期まで使用された。しかし、幕末までの海外知識には限界があった。19世紀初頭（文化文政時代）に手回し（自動）式パイプオルガン類（バレルオルガン）が渡来したことが確実だったが、あまりに見た人が少なく、後発のピアノ、リードオルガンと混同されたり、舶載し易く安価で小型のシリンダー式ミュージックボックス類をオルゴールと呼ぶようになった。つまり西洋の「音楽からくり」全てがオルゴールと呼ばれていた。オルガンは元々、「機械」「機関」「器官」を意味する言葉なので、これは翻訳上、自然の成り行きでもあった。明治期には漢語系の「風琴」の文字が当てられ、次いで英語の「オルガン」と変わった。以下の文献が参考になる。

水戸徳川博物館；『諸物會要』、オルゴールという名称と共に図面が表示されている唯一の記録であり、江戸時代のバレルオルガンに関して最も古く（化政期）、しかも出所が確実な記録である。（赤井発見）。

内閣文庫；『弘化雜記』（1845）幸宝丸、捕鯨船に救助された廻船の記録に「ヲルコル」。

福島市歴史資料館等；『海外異聞』（嘉永7年、1854）に犬吠から漂流してスペイン船に救助され、メキシコのマサトラン市に至った記録。鍵盤楽器の図がある。絵師にとっては伝聞情報である。初期のメロディオンはスクエアピアノに似ており、ピアノかオルガンか区別がつかない。

仙台市立博物館；万延元年（1860）、仙台藩の玉蟲佐太夫が使節の随員として米国渡航。『航米日録』、単語帳などに「ヲルコル」の記録がある（中村洪介氏紹介）。また同じ使節で渡米した村垣淡路守が『遣米使日誌』中に「オルゴール」として教会のオルガンを記述していた。オルガンを表す言葉が「オルゴール」であったことは確実なのである。

この「オルゴール」の考古学的な遺物が発見されると良いのだが、柔らかい金属パイプは歌口が壊れて鳴らなくなればメタルとして流用されてしまう可能性が高い。最も残る可能性があるのは手回し式バレルオルガン専用の硬い木製バレル

かと思われる。これは楽器から外すと使い道がないため、楽器が破壊された後にも残る可能性がある。何に使ったかわからないが「珍しい品物」として骨董化する道が有り得る。このバレルは音楽を記録した楽譜と同じ物であり、骨董店の奥や豪商の蔵などに埃をかぶって放置されている可能性は残っている。

『草津「喜びの谷」の物語ーコンウォール・リーとハンセン病』と私

中村 茂

表題の著書出版に至るまでの、とくに研究当初のことや研究の今日的意義についてお話ししたいと思います。

メアリ・ヘレナ・コンウォール・リーは明治40年11月、50歳の時に英国聖公会福音宣布協会（SPG）の宣教師として来日し、8年後の大正5年から、ハンセン病者が集住した群馬県草津町湯之沢区で病者救済をめざす聖バルナバ・ミッションを展開した。私はこの人の存在を45年ほど前に知った。それは、かつて湯之沢で彼女に出会い大きな影響を受けたアララギ派の歌人桜戸丈司氏を通してだった。それから35年ほどが過ぎ去ったあと、私は彼女についての本格的な研究を始めた。

研究開始当初の疑問の一つは、なぜ彼女は、20世紀初めならば高齢と言って過言でない50歳の時に、宣教師の道を歩み始めたのかということだった。この疑問を解くには英国時代の彼女について知る必要があるのだが、貫民之介著『コンウォール・リー女史の生涯と偉業』や徳満唯吉執筆・貫民之介校閲『湯之澤聖バルナバ教會史』は、この点についてはごく簡単に記しているにすぎなかった。そこで、これらの文献が彼女の生地と記しているカンタベリーで手がかりを探すことにした。ところが、カンタベリーに行ってみると、そこにはハイ・リーという所はなかったのである。私は唖然とした。

地名辞典と人名辞典を調べると、マンチェスターの南に位置するチェシャーにハイ・リーという所があり、そこに建つ邸宅ハイ・リー・ハウスにリチャード・ヘンリ・コンウォール・リー（グ

レイ・オブ・コドノア男爵) が住んでいることが分かった。早速リチャードに会った。彼が見せてくれたコンウォール・リー家の系図との出会い、それが私の本格的な研究の第一歩になった。そこにメアリ・ヘレナ・コンウォール・リーの名が記されていたからである。

系図によれば彼女の父エドモンド・コンウォール・リーは、五代前の家長ジョージ・ジョン・リーの六男である。六男ならば、結婚後は他の地に分家を構え、そこでメアリ・ヘレナは生まれたはずである。生地を探るべく英国公文書館のファミリーレコードセンターで出生届を探し、それを見付けた。彼女の生地はカンタベリーのセント・ジョージズ・プレース3番地であった。

その後、5回ほど渡英し資料収集をした。それは、一つの疑問を解く資料の発見が新たな疑問を生む、その新たな疑問を解くために資料を探すということの繰り返しだった。彼女に関する資料を探索し収集した主な機関などは、コンウォール・リー本家、英国公文書館、ハンプシャーレコードオフィスをはじめとする各地の地方公文書館、ブリッテイッシュ・ライブラリー、カンタベリー市図書館やジャージー島セント・ヘリヤ市図書館など各地の地方図書館、SPG関係の資料が保存されているオックスフォード大学ローズハウス・ライブラリー、父エドモンドが所属した第97歩兵連隊記念館(ケント州)、英国陸軍博物館(ロンドン)、ランベス宮殿図書館(ロンドン)などであり、資料送付を依頼した主な機関は、聖アンドルーズ大学図書館、英国南部の村ハンプル・ル・ライスの地方史研究会、米国聖公会公文書館、カナダ聖公会公文書館などである。

このうち、二回目の渡英の時にランベス宮殿図書館で発見した資料は、先に記した当初の疑問を解く重要な資料となった。それについて簡単に書くと、1929年に一時帰国した彼女がSWWの創立50周年記念式で湯之沢について語ったことが『湯之澤聖バルナバ教会史』に記録されている。SWWとは体の不自由な人、病弱な人を会員とする英国聖公会関係の祈祷会で、月刊誌『The Watchword』を発行していた。そこで『The Watchword』にその記録はないかと考え、所在を探った。その結果、ランベス宮図書館が所蔵していることを知った。同図書館で同誌を閲覧すると、1929年12月号に彼女の話の全文が掲載されていた。その冒頭で彼女は「私が今あるのは、少女のころ

ウィルキンソン牧師から強い影響を受けたからです」と語っていた。この資料の発見からウィルキンソンと彼女との接点を理解しなければならないという新たな課題が生まれ、それに取り組むことになるのである。以上が研究開始当初の話である。

彼女と湯之沢について研究する今日的意義について私が考えていることを記せば、第一に日本ハンセン病史を検討する視座になり、第二にハンセン病問題検証会議の指摘を検討する視座になるということである。第三は次のことである。今日の日本で問題となっているワーキングプア、理不尽な殺傷事件や自殺などの深刻な問題は、なるほど個々人に責任があることはもちろんであるが、一方で人を大切にしない社会の風潮によって排除され、孤立を余儀なくされている人々がいることを示しているのではないか。人を大切にしない社会の風潮の根底を流れる思想はハンセン病患者を排除したそれと似通ったものではないかという視点から、現代日本のあり方を検討する視座となるのではないかということである。

明治期の讃美歌

手代木俊一

今回『日本のプロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』を3月に刊行したので、明治期の讃美歌・聖歌史(以下、讃美歌)の概要を「明治期の讃美歌」と題して発表した。その際「明治期の讃美歌」の内容に触れるだけでなく、出版の年が年齢的に区切りの歳と重なったので、ここで今までを振り返り、讃美歌との出合からこれまでとこれからの予定を、言語、音楽、キリスト教に関する個人的感想等を交えて自伝的な発表をさせていただいた。

「明治期の讃美歌」の日本の讃美歌史の揺籃期にあたる。わたし自身の少年期を考えると、日本語の歌に関しては75調の歌が歌いやすい歌として記憶が残っている。ここで明治初期ゴープルが都々逸(7775)の形式に訳した讃美歌《よい国あります たいそう遠方 信者は栄えて 光りぞ》と、その改訳をとおして原曲86調が75調になると日本の歌としておさまりが良くなってい

く過程を紹介した。

エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス、彼レニ
子供中、
信スレハ属ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、○
サウ聖書申ス
エスワカタメニ、天ノ御門ヒラキ、ワカツミユル
シ、ソノチニヨレリ、ハイエス等、
エス愛スイツモ、ワレヨワヒトテモ、ワカ病気助
ケニ、御座ヨリ下リ、ハエイス等、
エスワカ生涯中、ワカソバ居マス、ワレ死ヌトテ
モ、ワレヲ天ニトモノヲ、ハイエス等、
ヨキ土地アリマス、タイソフ遠方、尊者栄華ニ立
ツ、日出ノヤフ、アヽカレウマク、主救者ホメル、
名挙ケ高く、讚美セヨ、
ヨキ土地キタル、早々コヨ、モフマタマタス、ソ
フヨカロフ、アヽワレウレシ、罪ヲモユルシ、主
汝トモニ、サイワイアロフ、
ヨキ土地スペテ、人ヒカル、天父カマツテ、アイ
キヘヌ、アヽ天ニハシレ、御褒美トリテ、日ヨリ
スクレ、光明アロフ、
右ハ此度ハランハツピーホイスト云歌ノ中音律調
子ヲ合せ和語ニ直訳シ婦女子小童ヲ誘引スル為ニ
カツ [不明]

直訳再稿ノ上出板致ス由也

(明治5 [1872] 年 早稲田大学大隈重信文書より)

5) ゴーブル訳讚美歌の変遷

楽しい国は徳ある 信者は栄悦ふ
耶蘇を崇めよ いとよく譽よ
加様に謡ふ限りない

(ルーミス・奥野訳『[讚美歌]

(高木玄眞筆写本)』 明治7 [1874] 年初期)

たのしきくには とおくある
しんじゃはさかえ かゞやく
エスをあがめて いとよくうたへ
こゑをたかめ たえせず

(ルーミス・奥野訳『教のうた』

明治7 [1874] 年12月)

またここで日本語歌詞における韻、強弱、アクセントの問題にし、そして明治期に植村正久が「五七とは文字の五七と心得べからず即ち音の五七をいへるなり」と述べていることに触れ、75調は文字の数ではなく音(音符)の数であると

いう現在にも通じる問題が日本の讚美歌史の初期から問題としていたことを発表した。

次に「讚美歌をとおして見た明治期」を概観したが、讚美歌集として最もレベルが高いと考えられる『新撰讚美歌』を中心に述べた。その際『新撰讚美歌』の装丁に関して小川和佑氏が「詩のなかの精神史」『文明開化の詩』(叢文社 昭和55 [1980] 年10月、181頁)の中で述べている内容に触れた。

この四六判、背丸総皮装、金箔押の楽譜付の本格讚美歌集であった。この見事な洋装本は当時、また完全な洋本装幀が少なかった時代に『新撰讚美歌』そのものがキリスト者でなくても、この一冊の手触りが「近代」そのものを感じさせたのではあるまいか。和本装の『新體詩抄』(その再販本は木版本であった)と並べて見れば、この一冊の具現した西洋が第二の文明開花であった鹿鳴館の時代の直後に置かれている歴史的時間と考えあわせて、それが明治二十年代の日本の「近代」というものがいかなるものであったかが実感としてわかるような気がする。

また『新撰讚美歌』と詩壇との関連を笹淵友一氏が『礼拝と音楽[季刊]』第2号、974/[Summer]の「特集 日本の讚美歌」で『新撰讚美歌』について(昭和49 [1974] 年8月、4-6頁)で述べているので、これを紹介したわが讚美歌史は大体四期に分けることができる。一略一以上四期の中で第二期は近代詩史の草創期に当たり、「新體詩抄」(明治十五年)以後近代詩への試みがつづけられていた。第二期の讚美歌はこの詩壇の機運と多少の関連を有するものがあるが、しかもその成果においては詩壇を数歩先んじており、詩壇に影響を与えたものもある。

この期を代表するものは一略一中でもとくに重要なのは「新撰讚美歌」である。一略一

本集は別所梅之助が示唆したように讚美歌史に一期を画したものであるが、これを詩壇との関係についてみれば、詩壇との距離が最も近接しかつこれに数歩を先んじて近代詩の行手に新領域があることを示唆したものといつてよい。それを証明するのは本集と藤村詩との関係である。

最後に明治期の洋楽がどんなものだったかを知るために、貴重な生き残りと思われるプラスパン

ド「北村大沢隊」の《Shall We Gather at the River》(讚美歌)を聴き、日本にとっての洋楽の実態を検証してみた。この「北村大沢隊」の音楽にはクラリネット他西洋の楽器を使用しているが、旋律だけで和声がない。わたしには、料理におけるオムライスやカツ丼のように和洋折衷の音楽に聞こえた。横書きの楽譜を縦にとり、8つ数えると行を改める8つ拍子の音楽のように思えた。今後日本における讚美歌の音楽を考える上で参考になる資料と考え、紹介した。

内村鑑三の文学観

田中浩司

内村鑑三は、芸術、主に文学を蔑視しており、それが理由で、多くの青年文士たちが離反していったと一般に言われ、彼の文学を見る目は功利的で曇っている、彼の文学論は文学研究のためではなくて伝道目的で偏ったものであると言う批評家もいる。

内村として時代の子であり、キリストの福音伝道が最大の使命だったから、その点は致し方ない事実であろう。しかし、その偏り、眼の曇りにもかかわらず、内村鑑三は近代文学史上に大きな位置を占めていることもまた事実である。本発表では、内村の文学観を自然主義文学・芸術至上主義文学と関連・対比させながらそのことを明らかにする。

確かに内村は文学を蔑視していた。が、内村が全くの文学嫌いでないことは、彼の所謂大文学論「何故に大文学は出でざる乎」「如何にして大文学を得ん乎」に一目瞭然で、内村は理想高き文学を評価し、理想なき文学を蔑視しているだけである。

内村の感化のもとにあった国木田独歩、正宗白鳥、小山内薫、有島武郎、志賀直哉らのほとんどはその文学観にも感化され、両大文学論が発表された1895年7月～10月以降も内村との関係を保っていたので、その文学観そのものが原因で離反したとは考え難い。むしろ離反の深層原因は、内村を通じて夢見てきた理想を生きることでできない自分自身に絶望したことである。

絶望した文士たちは、理想世界より現実生活に眼を転じ、ありのままの自己を観察し、真実を追求する自然主義文学、私小説の分野に活路を見出した。しかし、自己に真実を追究した結末に発見された真実は罪であり、行き着いた先は絶望であり、有島の心中はそのことを象徴的に示している。

一方で、内村の文学観を功利的であると断罪する文学観とは、文学は人生や社会のための奉仕者ではないと考え、それ自体を単体の独立作品として評価・解釈すべきだとする新批評的文学観であり、人生から乖離したところに芸術世界を構築しようとする芸術至上主義に通底するものである。

日本近代文学における芸術至上主義文学の典型は芥川龍之介で、実際彼は終生厭世主義的な鬱悶気を漂わしながら、芸術のための芸術の創作に取り組んだ。芥川にとって、芸術は人生よりも優位を占め、芸術こそが人生であり、実人生はその残滓でしかなかった。

然して、実際のところ芸術を全く人生から切り離すことは不可能であり、完全なる決別には自決という手段に頼る他ないという点において、芸術至上主義もまた人を死に至らしめる文学観であり、そのような文学と通底し、人生・社会という奉仕先や理想を持つ文学観を功利的と断罪する文学観もまた死の文学観なのである。

内村の文学観は、この点、人をして文学の中に埋没せしめる自然主義とも、文学を人生の上位に位置づける芸術至上主義ともその価値を異にする。まず真摯なる人生と高尚なる理想が文学より上位にあり、その文学観は、「勇ましい高尚なる生涯」を提唱した『夏期演説 後世への最大遺物』に展開された人生観と不即不離のものである。

内村には人をして志を立たしむる力がある。その志を燃やし続け、実行し続けて人は「勇ましい高尚なる生涯」を送ることができ、人生を芸術的に送ることができる。が、一方で、志半ばで道を外れた者は離反者となり、キリスト教まで捨てて背教者となる可能性がある。

全く対極にある文学観＝人生観を抱く内村と芥川であるが、内村は室賀文武を通じて間接的な影響を芥川に及ぼしていた。室賀は芥川によれば、「唯はた目には石鹼や歯磨きを賣る行商」で、「飯さへ食へれば、滅多に荷を背負つて出かけた

ことはなく、「その代りにトルストイを讀んだり、蕪村句集講義を讀んだり、就中聖書を筆寫したりし」「或聖書會社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈祷や讀書に精進」するだけの人物であったが、内村門下でキリスト信仰を得、晩年の芥川に多大なキリスト教的感化を及ぼした。芥川は週に何度も彼のもとに通って聖書の話聞いていた。室賀は、宮坂覚氏がすでに指摘しているように、芥川にとって「ある種の『憧憬の人』」となり、生ける一篇の詩となった。

しかし、内村が言う通り、「仮令イエスの教の如何に清く貴く美はしきを感じ之に憧憬すと雖も若し神の愛の如くに人を愛するの心を抱かざらん乎、其人の信仰の前途は知るべきである」。芥川は室賀とキリスト教の世界に憧憬するのみで、自己と神の間にある深い溝を超えることができなかった。

人生と信仰と詩の一致を語る内村の文学観がヨーロッパ中世的で時代遅れの古い文学観であると断じることは容易であるが、内村はその文学観によって、神という生命の源泉から切り離されたところに人間が自らの手で創造した文学は決して宗教の代わりになることはなく、自らの絶望を演出する道具に過ぎないこと、芸術における美は虚構の美に過ぎないものであり、救いになり得ないこと、人生を真摯に生きることが人として最も必要な芸術であり、真の美であることを示した。

内村も決して「厭世の闇」を知らなかったわけではないし、彼もまた自己に絶望したことがある悲しみの人であった。ただ、内村と近代作家たちとの差は、暗澹たる社会と人生にあり、内村が自己の暗闇に絶望することをやめ、暗闇から光の世界へと渡されたキリストという橋を歩み続けたのに反して、文士たちは、一旦は闇の向こうに光を見たにもかかわらず、自己のうちの深淵に怖気づき、橋の途中で引き返したことであった。

内村の文学観はまさしく橋の途上で描かれたものであり、橋の手前で渡ることを躊躇している人々、橋の途上にある人々に、勇敢にこの橋を最後まで渡り続けるよう励ます呼びかけなのである。

2007年度会費

会費 3,000円 郵便振替

口座番号00290-5-50622

加入者 横浜プロテスタント史研究会

- ・2008年度から会費が 2,000 円に変更されました。

横浜プロテスタント史研究会

2007年度会計報告

横浜プロテスタント史研究会会費納入者氏名

『横浜開港と宣教師たち』

伝道とミッション・スクール』の出版

かねてより計画していました本が 9 月末に刊行されました。横浜プロテスタント史研究会としては、今から 16 年前の 1992 年に『図説横浜キリスト教文化史』という写真に説明をつけた分かりやすい書物を有隣堂から出版して以来のことです。A4 版の書物で、絶版になっていますが、今なお再販して欲しいという声があるほどです。

今回、有隣堂の機関紙である『有隣』の 7 月号に『横浜開港と宣教師たち』というテーマで座談会を行いまして、その様子が 3 面にわたって掲載されていますので、すでにお読みになっている方がおられると思いますが、この題名で有隣新書として出版されました。このことは、横浜プロテスタント史研究会として大変喜ばしいことです。

横浜プロテスタント史研究会は今年の 9 月で 295 回の例会を数えました。多くの研究者の協力によりまして研究会が続けられておりますことは感謝に耐えません。当初は「横浜開港にともなう宣教師の研究」という目的を掲げて出発しましたが、研究会を重ねていくうちに研究領域が広がって、キリスト教史全般にわたりさまざまな発表がなされるようになりました。このような研究会の活動の成果が今回の出版につながっていったと

思っています。

宣教師たちは、多方面にわたって活躍した。教会を建設し、和英辞書、医療に関わり、聖書を翻訳し、そしてミッション・スクールを横浜の地に次々に根付かせた。海外伝道の宣教師の 3 分の 2 は女性で、男性宣教師は、教会建設や神学教育、聖書の翻訳に従事するのに対して、女性宣教師は牧師になれなかったので、教育や福祉的な面で活躍した。

今回の書物の内容は、横浜を中心として活躍した 11 人の宣教師を取り上げました。一般市民向けに手軽に読めますが、新たな視点から執筆され内容的に面白いものとなっていると自負しています。ヘボン、S・R・ブラウン、J・H・バラ、N・ブラウン、ベンネットの 5 人の男性宣教師、女性宣教師は、M・キダー、M・プライン、ピアソン、クロスビー、カンヴァース、O・ハジスの 6 人を選びました。これらの宣教師の中には横浜外国人墓地に眠っているものもいて横浜に長くとどまって活躍した宣教師が多い。

どうぞ、友人知人に紹介していただいて、この書物が広く読まれることを望んでいますので、よろしくお願い致します。(K.O) .

《会員出版案内》

- ・太田愛人『『武士道』を読む 新渡戸稲造と「敗者」の精神史』平凡社新書 2006 年 12 月 780E
- ・大島良雄『バプテスタの水戸・平伝道 1885 年-1941 年』ダビデ社 2006 年 8 月 1500E
- ・大島良雄『バプテスタの横浜地区伝道 1873 年～1941 年』381 頁 ダビデ社 2007 年 8 月 2,300E
- ・中村 茂『草津「喜びの谷」の物語—コンウォール・リーとハンセン病』 教文館 2007 年 10 月 1800E
- ・手代木俊一 『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治期』港の人 2008 年 3 月 4200E

(編集後記)

会報 43 号をお届けします。研究会の皆様のご活躍とご健康をお祈りしています。(K.O) .